

負けねど飯館!!

かわら版 5

No.5
2012年12月11日

愛する飯館村を運せプロジェクト
負けねど飯館!!



http://space.geocities.jp/iitate0311/

編集部 渡辺 富士男 〒960-1241 福島市松川町西長埜 8-17
メールアドレス fuyu-no-yama.11@ezweb.ne.jp 電話 090-7568-7392

あれから1年9ヶ月

月日の経つのは早いものと言われてますが、本当にその通りですね。その間、私は何をしていたのでしょうか？市内の公務員宿舎に避難し、180度回転した生活に入り、夜も満足に眠れず、夜中にベランダに出て、飯館はあの星の下あたりかなーと眺めていると、自然に涙が流れ悲しい毎日でしたが、最近では、少しは落ち着きました。時々、自宅(飯館)に帰り、あたりを見ますと、荒れ果てた田畑そして家の周りまでイノシシが自由に出入りし、親子で遊んでいる姿も見られます。そんな時、私の考えることは、これから2年~3年かけて除染しても、本当に戻ることが出来るのかなーと思い、淋しさと悲しさ一杯で避難先へ戻ってきます。飯館に居る時は、近隣の人達と毎日会ってお茶を飲んだり、話をしたり、今頃の季節だと、「キノコ採ったがー？」と声をかけると、あ

リレーエッセイ

前回 上田 秀さん から 今回 大内 定子さん へ

の方が「いっぱい取ったぞー！」と返事が返ってくる、そんな自然で美しい村に今は誰もいない。残念で仕方ありません。近隣の人達にも会えず淋しい毎日ですが、私の家族は皆さん誰でも知っての通り大家族と一緒に住んでいます。避難と同時に生まれた孫も今は走って歩く程に成長しました。何も知らない孫達ははしゃいでいる姿を見ると元気づけられ、がんばらなくちゃと勇気づけられます。残り少ない人生を飯館の自宅でのんびり暮らしたかったが、住むことの出来ない理由、それは放射能です。昔から放射能という言葉は知っていましたが、こんなに恐ろしいものとは初めて知りました。今、私に考えられることは、東電に最大の責任をお願いすることです。

前乗 大内 定子

何が主役？ 誰が主人公？

どうやって生きていますか？ どうやって行きますか？

議会が発行する「議会だより」と重複する内容もありますが住民の関心が高い避難区域再編について議会議員より情報提供をいただきました。



経過

24年度当初、国の方針として避難指示区域の見直しが「避難年数により賠償割合を変える」という内容とセットで村に提示された。除染が行われてもいない段階での提案であり反対を表明したが、これに応じなければ精神的慰謝料等の避難年数に応じた一括賠償を行わないということから検討せざるを得ない状況となる。

当初、国は帰宅困難区域(長泥)居住制限区域(その他)避難指示解除準備区域(大倉、佐須、八木沢、二枚橋)で6年、3年、2年の案を提示してきた。村としてはできる限り賠償に差をつけたいために、特に地区の一部でも年間50ミリを上回る行政区を5年とすること、それ以下の行政区を4年とすることを提示して粘り強く交渉してきた。また、25年の秋までに除染と仮置き場の搬入及びインフラ整備が終了できない場合は直ちに1年延長を認めることも国に確認している。村民の中で賠償額が異なることに対して不公平感が生じているのは認識しているがご理解いただきたい。

- 問. 2年間で除染は可能か？ 冬の作業は不可能であろう。机上の空論ではないのか？
- 答. 作業員を4,200名投入する。天候の状況によって作業員を柔軟に配置する。(環境省担当者)
- 問. 精度の高い除染を求め。荒い除染をされたのでは困る。
- 答. もし十分に線量が下がらない場合は再度除染を行う考えである。(環境省担当者)
- 問. 帰還時期の判断は自治体や議会の判断を尊重するとのことだが、法的にそれが保障されるのか？
- 答. 法的には国(内閣総理大臣)が決定するが、決定の前に自治体との協議を重視する。一方的に決めることはしない。(審議官)

あきらめないことにしたの

渡邊 とみ子

前田

避難先でイータテベイクやいいたて雪っ娘の種繫ぎをするために奮闘してきましたが、どんな過酷な状況の中でもちゃんと実を結んで育ててくれた「いいたて雪っ娘」を手入れしながら私が書いた詩があります。

あきらめないことにしたの 沢山悔しい思いをしたよね
沢山、沢山泣いたよ でも、生きてる やっぱり止まっては駄目だよ
どんなに小さな一歩でも前へ進んだら ほらね。実ってくれたんだもの
植物は、こんな状況の中でも頑張って生きているんだもの
だから私は あきらめないことにしたの。

このだから私はあきらめないことにしたのを書いた時には号泣してしまいました。私の覚悟の言葉だからです。「イータテベイク」と「いいたて雪っ娘」があったからこれまで頑張ってこれました。どんなに辛くても、悔しい思いをしてもあきらめないことにしたのという詩を読み返し、飯館村で再活動するには時間も体力もそう多くは残っていませんが、今関わっているかーちゃんのカプロジェクトのかーちゃん達の歴史を残してあげたいという新たな夢に向かっていきます。



募集

ご意見、ご要望のある方はぜひ編集部までお知らせください。まっています！
090-7568-7392
(渡辺富士男)

編集後記

果たして村や国で決めた帰村期間の中で帰村したとして、帰村しなかったとして、本当にそれが私達の将来の幸せなのでしょうか？もう時間がない……！そう、つぶやいた年配の人がいました。これから、それぞれの人生設計はどうなってしまうのでしょうか？きっと戻らないであろう子供達に自然豊かな飯館村の四季折々をどんなふうに分らせてやればいいのか？孫と縁側で仲良く過ごす時間は、果たしてどうすればいいのか？共有する意識が必要だと思います。何もかもが走馬灯の如くです。……みんなの声を、何が正しいかをどんな風に伝えればいいのか？日々、悩む事々々でいっぱいです。(F)



怒.... 菅野 哲男 蕨平

平成23年3月11日 あの大震災、原発事故により私達家族の生活や将来は無惨にも崩れ去った。災害発生から3月15日まで停電のため、何も情報が届かず原発事故があったことさえ知らなかったのである。真実を言わない政府、さも放射線は怖くないという県、安全を強調する村のもとで原発事故から約3ヶ月、我々は高線量であるにもかかわらず屋内退避を命ぜられていた。しかも当部落は村内唯一30km圏内であり、郵便、宅配便等などの配達も拒否されガソリン不足の中、飯桶あるいは、川俣まで受け取りに行かなければならない陸の孤島状態であった。又、飲水の汚染も知らされ

ず3月20日まで放射性物質の入った水を使い家事をし食事をしていたのである。しかも内部被曝の検査は、世代を代表する5名のみの検査で住民全員の被曝量を推し量ろうとしていたのである。原発立地町村住民より遠方の我々が被曝をしている状況にだれも責任をとらないのはなぜか？我々住民は、今、原発事故の健康被害のモルモットとして扱われているようで毎日がやりきれない思いで一杯であり、この怒りをどこにぶつければいいのか？今、国会では権力闘争に明け暮れ選挙の時だけ頭を下げ当選すればふんぞり返っているのは同じ血が通った人間とは思えない。我々100%非がない被害者を置き去りにして政治を語る資格は無い！

日々の綴り



画:柴口 正武

帰村へ向かって 赤石澤 備 上飯桶

皆さん今日は、元気で毎日の生活を過ごしておりますか？昨年三月十一日の大地震、東京原子力福島第一発電所の事故により、避難を余儀なくされて一年九ヶ月に成りましたが未だ帰村できず、つらい生活を送っております。然し私はよくよくしていてもどうにもならないと思しよっちゅう我が家に行き、家や自分の土地等を手入れしております。たとえ明日に何が起きようと又私がどうなろうと、そして又他人になんとと言われて今日一日一日を復興に向け自分の故郷を(屋敷、耕地、山)を手入れしております。そして、やがて若い人達も帰村出来る日が来た時に喜んで帰村出来るようにして

置きたい、今一生懸命国を挙げて除染に励んでいるようですので失望せず頑張ろうではありませんか。もしも何の手入れもせず草木が生え、家屋が壊れるようになっていたなら若い人たちもよけいこれなくなるのではないのでしょうか。今に良い奇跡が起き、すぐに帰れるかも知れませんが、私はそう思い頑張っています、皆さんも希望を捨てず頑張りましょう、放射能に負ける前にストレスが溜まり溜まってノイローゼ等になっては大変困ります。そんな事の無い様に皆で励まし良いようになるよう念じ、我々老人に出来る事を行いながら元気で明るい明日の来る日を待ちましょう。

飯館に思いを馳せて 高橋 秀宜 長泥

あの日、あの時まで、平穏に暮らしており、千年に一度の大震災が起きるなど、誰が想像していたでしょう自然豊かな飯館で、大地と向き合い作物を栽培し、牛を飼い日々の暮らしを営んでいました。原発事故が起き、放射線が飯館村に降って、私たちは今、避難しています。「長泥に帰るつもりか」って、聞かれて、私は、「できたら帰りたい」そう答えました。なんで！って言われても…、「そこが故郷だから」と、私は心のなかでつぶやいた。今、長泥地区には、自由に入ることができません。七月のある日、長泥への道が閉ざされたのです。私は、胸が押しつぶされるような、息苦しさで襲われました。「なぜ、どうして?」、自問自答しても、私には答えを出しようがありません。今はただ、飯館村では味わったことのない過酷な避難生活を受け入れなければいけないのかも知れない。

最近思うこと 菅野 和彦

3.11東電原発事故より放射能に翻弄されながら、私達は二度目の冬を迎えます。先の見えない避難生活に大きなストレスを感じながらの毎日です。正直言って、私は今でも「帰還できる」のかどうか判断もできず、意に反して一歩も踏み出せずにいます。飯館は今区域見直しや各地の実験除染、復興計画第二版等、賠償問題も含め、一見復興が進んでいるかに見えますが、私の中では何も変わってないのです。復興計画の中で再生可能エネルギーやバイオマス発電が謳われていますが、飯館の気候環境からしたら夢物語にしか思えませんし、食糧生産は世界一有名になった飯館では疑問です。ましてや帰還後、農産物の価格補償で生計を図ることは農家の心を否定する空しい計画だと思います。いま放射能汚染と言うどうしようもない現実を承知しています。でも、地域の再生を目指すなら、次代を担う若者の帰還がぜひとも必要です。でなければ村の将来はありません。また、帰還時の

比曽

私たち主力年齢は60～70歳。時間が限られます。人は幾つになっても夢(生きがい)がなければ生きられないし、目標がなければ前に進めないのです。みんなで「除染帰還後のことを考える」そういう時期になったと思います。今、色んなところで3人寄れば「帰還」「復興」の話が出ます。それぞれに熱く語るなかに素晴らしい発想や意見があり、これを復興計画に参考にできるシステムがあったらと思う時があります。「地域で戻ろう」「みんなで帰ろう」というのなら地域に合った、お仕合せではないみんなで考える復興計画も「あり」と思っています。そして、もし万が一めでたく帰還の暁には、また昔のようにみんなで集まって、日本一の(自分的には)「比曽の三匹獅子舞」を奉納し大祭をするのが夢なのです。

笑顔忘れずに 高橋 ちよ子 飯桶

皆さん、いかがお過ごしでしょうか？無我夢中で過ごした1年9ヶ月、絶対に違っはならない福島原子力発電所の水素爆発、その事によって放射能の影響で村に居られなくなったり…等など、起きてはならないことが起きてしまった。いくら恨んでも憎んでもどうにもならないもどかしさ、政治家の皆さんは迅速に迅速に復興をしようと言っていますが、私には全然と云っていい程復興をしているように思えません。私だけでしょうか？全国の皆様、福島市の皆さん、そして周りの皆様の励ましや、優しい言葉をかけていただいたことに感謝感謝！原発はとて恐ろしく、怖いものだと云うことを代々(若い人達)に伝えていかなければならない。これが私たちの使命だと思います。後ろを振り返ることも大事ですが、又、前へ一歩一歩前進しなければならぬと思ひ、いつも笑顔忘れずに一日一日を過ごしています。

「ふう…」 坂本 紀美子 草野

「ふう」当時みんな大きなため息をついていた。原発事故以来どうなるのか解らない将来の話をする度に大きなため息をついていた。それから二度目の冬を迎えようとしています。最近の話題は「帰村するの?」「しないの?」「どうするの?」こんな会話が多くなってきました。ある学者は「大丈夫です!」と言う「低線量被曝は危険です」と言う学者もいる。何が正解で、何が間違いなのか解らない…。なるほどと思うのは政府が言っていた「直ちに影響はありません」の言葉です。将来に影響があるかも知れませんがと云っているようにも聞こえます。便利で無責任な言葉です。「帰村する人」「帰村しない人」家族のこと将来のことを考えた末の決定は多分どちらも正解なのだと思います。私はと言うと「石橋を叩いて渡る。」そんな言葉が頭の中をよぎったりもします。「どうしよう?」また、大きなため息が続きます「ふう」。



画:柴口 正武

子供を通して思う 阿部 久美子 宮内

私は今福島市内の借り上げ住宅で家族と暮らしています。最初は車の交通量が多くてイヤでしたが、何とか慣れました。近所の人達ともお話しをするようになって、飯館から来ましたと言うと、「飯館は岩部ダムによく釣りに行ったよ」とか「こうなる前に飯館牛を食べておけばよかったな」とか言われます。どの人も「飯館はいい所だったね」と言ってくれます。自分も飯館を離れてみて飯館はのんびりと過ごせて、季節感も感じる事ができてよかったなと思いました。今年の4月から家の近くの学校に子供を転校させて、子供も私もなじめるか不安でしたが、学校でも近所でも子供たちと仲良く遊ぶことができてよかったです。私自身も学校のクラス役員は全員なるので

お友達になったお母さんに教えてもらいながらやっています。今、福島市では子供にガラスバッチを持たせています、家の子供は福島市に住所がないので持たせてもらっていません、飯館村では子供たちに一度もガラスバッチを持たせてくれないので今からでも配って欲しいです。平成26年には除染をして避難解除になるようですが、子供の事を考えると帰れないと思えます、帰る帰らないの選択肢が私達にも欲しいと思ひます。そこから、復興住宅や移住を考えている人への支援なりをして欲しいです。飯館を捨てるのではなく、離れたとしてもつながっていて飯館を守っていけるといいなと思ひます。



撮影:菅野 千代子